

女子大國文

第百六十八号

令和三年一月発行

女子大國文

第百六十八号

令和三年一月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百六十八号

令和三年一月十五日 印刷
令和三年一月三十一日 発行

〒605-8585 京都市東山区今熊野北日吉町三番地

編輯兼
発行者

京都女子大学国文学会

電話 〇五二五三一九〇七六

FAX 〇五二五三一九一二〇

振替 〇〇八〇一五一三一四

〒605-8584 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所

西村印刷株式会社

電話 〇五二四一四一〇八代

FAX 〇五二四三二六二八二

今川氏真と和歌 小山 順子 (一)

—— 天正三年『今川氏真詠草』をめぐって ——

『月令抄』二本 田上 稔 (二九)

—— 両足院本と清家文庫本と ——

抄物に見られる打消接続助詞「いで」 山中 延之 (五八)

—— 柏舟宗趙講『周易抄』を中心に ——

京都女子大学図書館所蔵

『方丈記』伝藤田友閑筆写本

—— 松花堂にあった不純本文の片鱗 ——

中前 正志 (六七)
梶山 柚輝

彙報 (一四)

京都女子大学国文学会

彙報

【二〇一九年度優秀論文博士前期課程修士論文】

○『女子大國文』第一六八号をお届けいたします。

○前号彙報欄でご報告いたしました通り、今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、予定しておりました学会行事をすべて中止せざるを得ませんでした。今回、五月に開催するはずでした優秀論文発表会で口頭発表が予定されていた、大学院博士前期課程修了生二名、学部卒業生三名の方々に、せめてもの記念にと、論文要旨と論文執筆体験記・在学生へのメッセージをご寄稿いただきましたので、是非ご覧ください。

研究室だより

○前期は、学生・教員共に慣れないオンライン授業と格闘する日々でしたが、後期に入り、少人数の演習科目などで一部対面授業も行えるようになりました。いまだ厳しい状況であることには変わりありませんが、学生・教員一同、健康に留意しつつ励んでおります。

谷崎潤一郎「魔術師」に描かれる架空の街

— 燦爛たる異空間の演出 —

稲垣 あやか

〈論文要旨〉

「魔術師」は、大正六年一月『新小説』（春陽堂）に発表された谷崎潤一郎の短編小説である。浅草の六区に似た架空の街を舞台としており、主人公「私」は恋人である「彼の女」に連れられて、絶世の美貌を持つ魔術師がいると噂の公園へと足を踏み入れる。公園の中心部には「魔術の王国」と称される小屋が建っており、小屋の中では魔術師による魔術の演目が毎晩繰り広げられていた。小屋へ入る前に「彼の女」との永遠の愛を誓った「私」であったが、ついには魔術師の美貌に屈し、「半羊神」となって魔術師に仕えたいと願い出る。すぐさま「彼の女」も「私」と同じ姿への変身を望み、二匹の半獣の角は絡み合って離れなくなってしまう。物語はここで幕を閉じる。

本作のように、作品の舞台となる場所の明言を避け、架空の街として物語が進んでゆくというのは、それまでの谷崎の作品では類を見ない。そこで、谷崎が架空の街の雰囲気をもどるように演出

しようとしていたのかを明らかにしてゆきたい。

まず「魔術師」の書誌情報を整理する。本作については田鎖数馬氏『谷崎潤一郎全集 第四巻』解題に詳しいが、書誌情報への言及は原稿の所在と諸単行本の紹介に止まっていた。そこで、原稿を所有する芦屋市谷崎潤一郎記念館のご厚意のもと、原稿と創作ノート、執筆を手伝った人物の回想録を確認した。原稿に付された『新小説』編集者の細田源吉の回想録によると、原稿の執筆は当時編集担当を務めていた細田と田中純の手伝いによって大正五年十二月、完成にいたったという。そして発表後は大正六年、八年、昭和二年と三度単行本に収録されている。これらはすべて春陽堂から出版されており、発行時期が重なっているものもある。そこで、三種類の単行本の系統について検討を加えたところ、昭和二年に発行されたものは大正六年の初刊本の流れを汲むものであり、それとは別の系統として大正八年に発行された単行本が同時期に存在していたことが分かった。

原稿には書き換え箇所が多く、刊行後の本文も単行本によって異なる箇所が散見される。ここから、改稿の過程をたどることによって谷崎の意図を探ることができると考え、確認できる本文を突き合わせた。まずは原稿の書き換え箇所をすべて抽出し、言葉がどのように変更されているのかを確認した。さらに、刊行後の

異同に関しては、初出『新小説』掲載の本文と大正八年発行のものと比較した。

原稿には一二箇所もの加筆が見られるが、その中でも特に作品の雰囲気にかかわるものに限定し、別の言葉に言い換えることによって、与えられる印象がどのように変化するのかを考えた。「大通り」から「アエニユウ」、「曲芸師」から「チャリネ」など、おおよそ同じ意味を持つ西洋の言葉への言い換えが複数見られ、読者に異国を想起させようとする意図が窺える。

また、初出と大正八年版単行本との間には一五三箇所の異同がある。これらを改稿の種類ごとに分類する作業を行ったところ、原稿の書き換え箇所と同じく、作品の雰囲気をより明確にするためと考えられる変更がいくつか見られた。「料理屋」から「カフェエ」、「宿業の報い」から「淫楽の報い」への変更がこれに該当する。そのほか、書き換え箇所と異同箇所のどちらにも作品舞台となっている場所の強烈さを際立たせ、物語の最終盤に期待を持たせるための変更を見出すことができた。作品の発表をもって完成とせず、約二年半後の再刊にあたってもお新たな変更を加えているという点に、作品の雰囲気を保つための労力を惜しまない谷崎の姿勢を見ることができるといえる。

ところで、本作には漢字が多く用いられている。谷崎は、種類

が多く字画が複雑であるという漢字の特徴を美点と捉え、紙面に多種多様な漢字が用いられる様子は、まるで宝玉が鏤められているようだと感じていた。そのため、漢字の使用法に厳密なルールを定めることで、より多くの漢字を用いようとしていたのである。本作に漢字が多く使われているのも、美しさを表現するためであったと考えることができるだろう。

また、規則正しく漢字を使いたいという谷崎の考えは、単行本の改稿過程からも窺うことができる。改稿の意図の一つとして、より正確な漢字使用に近づけるための変更が挙げられる。谷崎は本作においても規則正しい用字を心掛けていたが、初出では谷崎の意に沿わない表記となっていた箇所がいくつかあり、それらは初刊以降で適宜修正されている。たとえば、「虹霓」という言葉に付されたルビが初出では「にじ」となっていたが、初刊以降「こうげい」に改められている。これは、「一定の漢字には一定の発音のみ」を与えるという谷崎の考えに基づく変更と言える。

漢字に無理な訓みを与えないことをルールとして定めていた谷崎は、漢語に西洋の訓みを充てること（以下、「漢字カナルビ表記」と記す）も好ましくなくしていた。こうした考えは初期からすでに見られ、台詞内の書生言葉や国名など限定的な場面でのみ使用していた。しかし、本作ではその規則に当てはまらない使

用が複数ある。「頭帕」^{カアバン}「袍衣」^{トリーガ}「草鞋」^{サンダル}「半羊神」^{フアウレン}の四種類がそれに該当し、これらはすべて物語最終盤の「魔術の王国」の場面に偏っている。

「魔術師」以前にも例外的な漢字カナルビ表記が用いられているものはある。明治四十四年「少年」と大正三年「金色の死」の二作品が挙げられるが、「少年」は西洋館二階、「金色の死」では主人公の友人が創造した理想郷といったように、どちらも登場箇所は最終盤の場面に集中している。これら三作品において漢字カナルビ表記が登場する場面は、いずれも主人公の欲望を充たす特別な営みがなされる場所で、絢爛たる異空間として描かれている。ここから、自身の設けた漢字使用のルールに反する用字ではあるが、その場面の煌びやかさを表現するために漢字カナルビ表記を用いていたことが分かる。

これまで、本文の改稿過程から谷崎がその街をどのように描こうとしていたのかを探ってきた。変更箇所からは、異国情緒を漂わせたり非現実的要素を連想させたりと、より現実離れた空間であることを示そうといった意図を読み取ることができ、作品の雰囲気を正確に書き表すために相応な苦労を重ねていた様子が明らかになった。そして、これらの推敲はその先に繰り広げられる展開の鮮烈さを強める役割を果たしていた。最奥の異空間では特

別な営みが行われているが、その場面を表すために例外的な漢字表記までも利用しているのである。随筆などで語られていた谷崎の漢字に対する考え方を、本作を通じて実際に確認することができた。

〈在学生の皆さまへ〉

このたび、こういった文章を書かせていただくにあたって修士論文を読み返しました。改めて読んでみると、もつとこうしたら良かったと思う点が多々見つかったとともに、修士論文に向けて研究を重ねていた、忙しくも楽しい日々を思い出しました。

研究をする中で最も印象に残っているのは、「魔術師」の執筆原稿を閲覧できたことです。原稿が兵庫県芦屋市谷崎潤一郎記念館に所蔵されていることを知り連絡を試みたところ、ご快諾いただき閲覧が叶いました。一縷の望みをかけて依頼をしたので、快いお返事をいただけるとても嬉しかったことを覚えています。そのほかにも、初刊本を閲覧するために東京の近代文学館へ出向いたり、西へ東へと奔走した二年間でした。その結果、今まであまり触れられてこなかった書誌情報を詳らかにできたので、「何事も気になったらまず挑戦する」ことがいかに大切であるか、身をもって感じました。

私は、この四月より新聞社で校閲記者として働いております。

校閲記者の仕事は、記者が書いた記事の誤りを正すといったものです。校閲記者になるのは高校生の頃からの夢でしたが、大学院在学中に、谷崎と校閲記者とを結びつけることのできる随筆と出会いました。

『文章読本』で知られるように、谷崎は言葉への関心が非常に高い人物でした。昭和三十四年の随筆「気になること」には、言葉遣いの気になった新聞記事を切り抜いて保管していたことが記されており、その中で校閲という職業にも触れています。この随筆を読んだのはちょうど就職活動を視野に入れ始めた頃で、谷崎の研究から離れることを寂しく思っていた時期でした。なので、谷崎と校閲記者との小さなつながりにたいへん励まされました。

これは私に限った話ではなく、研究を進める中で得られる知識には、卒業論文のためだけでなく、人生に役立つものが多くあるでしょう。もし就職活動を控えて何になりたいか分からないと悩まれている方がいたら、いろいろな作品に触れてみるのも一つの手かと思えます。文学作品を通じて新たな選択肢が目に入り、自分の活路を切り拓くことができるかもしれません。

どの分野であっても、テーマに選んだ作家や作品に敬意を払い、真摯に向き合うことが何よりも大切だと思います。お身体には十分気を付けて、充実した学生生活をお過ごしください。

『木幡の時雨』の『源氏物語』夕顔巻の受容

——「五条わたりのあばらや」と八月の時雨——

松村美咲

〈論文要旨〉

『木幡の時雨』の男主人公・殿の中納言は、初瀬詣での途中で時雨に降られる。木幡で雨宿りをした際、中納言は女房らと『伊勢物語』の絵巻を鑑賞する女主人公・中の君を垣間見る。

さいご中将のゑなめり。「うらなく物お」といへけるあたり
にや、女ばうたち、「あな心う、こゝはみじ」と、をしまき
さまに、五条わたりのあばらやに、かりふししたる所のあめ
るを見て、「春やむかしの」と口すさびたるもてなしけわひ、
いみじうらうたげに、御身に引そふる心ちして、つくぐと
まぼりたち給へば、(後略)

(鎌倉時代物語集成第三巻笠間書院一九九〇年一八五ページ)

傍線部は、五条の荒れた場所に臥しているという状況や「春や昔の」が一致している点により、『伊勢物語』第四段を典拠としていると指摘されてきた。しかし、『伊勢物語』の本文には「五条わたり」「あばらや」「かりふし」の語は見られず、第四段をそのまま引用しているとは言えない。古注釈書に拠っている可能性

を考慮し、古注・旧注に分類される注釈書も検討したが、直接的な影響を与えていると認められるものはなく、古注釈書を引いているとも考えにくい。傍線部は『伊勢物語』第四段を典拠としているように思われるが、本文や古注釈書を確認する限りでは、それらを直接引用しているとはいいがたいのである。それでは、傍線部は何に拠って記されたのであろうか。

「五条わたりのあばらや」に注目して検討を進めると、「五条わたり」が『曾我物語』に、「五条わたりのあばらや」が『寛正百首』に見え、中世文学では『伊勢物語』第四段を示す表現として用いられていたことがわかった。これらは中世的な『伊勢物語』の理解から生じた表現であり、『木幡の時雨』の「五条わたりのあばらや」も中世の理解に拠るものと言えよう。「五条わたり」は第四段と同じ二条后章段である第五段と第二十六段にも見られる言葉であるため、中世になってこの三段が混同され、本来「五条わたり」のない第四段をも示すようになったと推測される。

さらに、「五条わたり」「五条わたりのあばらや」は、中世において『源氏物語』夕顔巻を表す言葉でもあったようだ。「五条わたり」は『弘安源氏論義』や『源氏小鏡』『源氏大鏡』などの『源氏物語』の注釈書や梗概書で、夕顔の粗末な家のある五条周辺を示しており、連歌の寄合書にも夕顔の付合語として記載され

ている。また、「五条わたりのあばらや」は、『車僧』などの御伽草子や謡曲「夕顔」でも夕顔に関連する言葉として用いられている。このように「五条わたり」「五条わたりのあばらや」は、中世の文学の中で『源氏物語』夕顔巻を示す表現として使用されているのである。これらは、『源氏物語』夕顔巻の本文では別本系統の陽明文庫本以外には見られないことを踏まえると、『源氏物語』原典ではなく、中世の『源氏』理解の世界から導かれた表現であると言えよう。おそらく「五条わたり」は、『源氏物語』夕顔巻の有名な冒頭にある「六条わたり」と、夕顔の陋屋のある五条のイメージが融合して生じた造語であり、中世において『源氏物語』夕顔巻を喚起する言葉として用いられるようになったと考えられる。

『木幡の時雨』の「五条わたりのあばらや」が『源氏物語』夕顔巻を表していることは、その受容の傾向を見てもわかる。先行研究で『源氏物語』の影響を受けていると指摘されている箇所をまとめると、夕顔巻が九例と最も多い。さらに、夕顔巻の引用は、物語前半の中納言と中の君が契りを交わして数日を過ごす場面までに集中しており、今回問題としている垣間見の場面もそこに含まれるため、前掲の傍線部にも『源氏物語』夕顔巻の影響があると見えよう。『木幡の時雨』の「五条わたりのあばらや」に

は、中世の『伊勢物語』第四段と『源氏物語』夕顔巻の理解の両方が反映されていると考えられる。

『木幡の時雨』が『源氏物語』夕顔巻から影響を受けていると思われる箇所は他にもある。『木幡の時雨』では、中の君が中納言と式部卿宮という二人の男君と出会い契る場面において、八月の時雨が降っている。しかし、時雨は初冬の景物であり、八月は時雨の降る時季としてふさわしいとは言えない。八月に時雨が降っていると思われる用例は、『蜻蛉日記』や『太平記』などの中古・中世の作品に見られるが、時雨を比喩的に使用したり本文が定まらなかつたりして確例と認められるものはない。さらに『うつほ物語』に八月の時雨が異例であると記されていたり、『栄花物語』に八月の時雨を避けるために内容を書き換えたと思われる場面があったりすることからも、八月が時雨の季節として不適切だと認識されていたことがわかる。

それでは、なぜ『木幡の時雨』では時季外れの八月に時雨が降っているのだろうか。誤写や作者が時雨の時季を勘違いしていた可能性も考えたが、諸本に異同はなく、十月・十一月と時雨が降る時季として正しい月を設定している箇所があるため、その可能性は低い。作者はあえて八月に時雨が降る設定にしたと思われる。それには『源氏物語』夕顔巻で光源氏と夕顔の過ごした最後

の時期が「八月」であつたことが影響していると考えられる。夕顔巻の「八月」と中の君が男君たちと時雨を機縁に出会うという趣向とを同時に取り込もうとしたために、『木幡の時雨』では本来の時季ではない八月に時雨が降ることになってしまったのである。さらに、中の君と二人の男君の契りの場面のみに出てくる「かゝる所のならひ（い）」が、八月十五夜の光源氏と夕顔の逢瀬の場面における夕顔の家の描写を踏まえた表現であることから、作者が中の君と男君たちとの逢瀬の場面で夕顔巻を意識していたことが窺える。『木幡の時雨』の八月の時雨は、『源氏物語』夕顔巻の影響による作者の意図的な構想だったと考えられる。

『木幡の時雨』の「五条わたりのあばらや」には、中世の『伊勢物語』理解に加えて中世の『源氏物語』夕顔巻の理解が反映されており、八月の時雨という趣向にも夕顔巻が受容されている。『木幡の時雨』では『源氏物語』夕顔巻が強く意識されていると言えよう。

〈在学生の皆さまへ〉

京女の国文で学ぶことができてよかった。修士論文を通して、私が一番に感じたことです。

執筆に際しては、行き詰まって悩んだり、時間に追われるあまり自分が何を書こうとしているのかわからなくなったり、苦労し

たことも多々ありました。それでも最後までやり切ることができたのは、先生方の熱心なご指導と周囲の励ましのおかげであり、『木幡の時雨』を研究することが本当に楽しかったからです。京女で学んでいなかったら、これほどまでに文学を研究するおもしろさを感じることはなかったでしょうし、今回の論文を書くこともできませんでした。修論執筆を通じて、『木幡の時雨』にひたむきに向き合い、分野や時代を問わず様々な作品に触れたことは、私にとって大きな財産になりました。

皆さまの中には、卒論・修論に対して悩みや不安を抱いている方もいらっしゃるでしょう。確かに執筆には体力も気力もいりませし、正直大変です。しかし、一生懸命に取り組めば、きっと文学を研究する楽しさを実感でき、学生生活のよい思い出になると思います。ぜひ楽しんで、ご自分の納得のいく論文を書き上げてください。

【二〇一九年度優秀論文卒業論文】

恋の仲立ちをする「都鳥」

— 中世の文献との関わりから —

梶山 柚輝

〈論文要旨〉

『我身にたどる姫君』（一二〇〇年頃から一二七一年の間に成立）と『とりかへばや』（一二〇〇年以前に成立）の「都鳥」は、都の場面において、恋の仲立ちをする女房を指す。両作品の諸注釈書は、「都鳥」の注に、『伊勢物語』第九段の都鳥を詠んだ歌、名にしおはばいざ言問はむみやこどり

わが思ふ人はありやなしやと

『伊勢物語』第九段 新全集二二二―二二三頁

を引く。この歌は、都から東国へと放浪した男が隅田川で「京には見えぬ鳥」の「都鳥」を目にし、鳥の名の「都」から望郷の念に駆られて詠んだ歌である。男は歌の中で、都に残してきた愛しい人の安否を都鳥に問う。『伊勢物語』の都鳥は、その名から都を思い出す契機であり、都にいる人の安否を問う存在である。この都鳥の用例は、『我身にたどる姫君』と『とりかへばや』の、男女を結びつける「都鳥」とは異なるため、両作品の注釈書の記

述では不十分だといえる。恋の仲介をする「都鳥」の、表現の根拠となる説明が必要である。

『伊勢物語』及びその第九段と同内容を収めた『古今和歌集』の古注釈書を見ると、『伊勢物語宗印談』（一五三三年成立）の第九段の注釈に、鍵となりそうな記述がある。『宗印談』は、「都鳥」を恋の仲介役として説明してはいないが、「都鳥」の「都」から「錦」との取り合わせを連想して載せた「錦鳥」を、『源氏物語』には恋の文つかひのおとこ女を云」と説明する。『源氏物語』に「錦鳥」の用例はないものの、「錦鳥」が「恋の文つかひ」だということは、恋の取り持ち役だということになる。「錦鳥」は、『我身にたどる姫君』や『とりかへばや』の「都鳥」と役割が共通している。

先に示した『宗印談』は、その注釈が連歌師宗祇の流派に属すると称した古注釈書である。「錦鳥」は、その宗祇の著した『宗祇袖下』（一四八九年以前に成立）や、宗祇の大師匠梵灯庵が著した『梵灯庵袖下集』（一三八四年成立）にも記されている。『梵灯庵袖下集』は、「錦鳥」が『源氏物語』の連歌寄合語にあるとも記す。しかし、連歌、連歌寄合書、連歌師の影響を受けた『源氏物語』の古注釈書に、「錦鳥」は確認できない。「錦鳥」の用例を調べても、右に掲げた文献以外では、近世に成立した連歌

学書に僅かに見えるほか、同じく近世に記された『戴恩記』と『古今若衆序』が知られる程度である。『戴恩記』や『連歌秘伝抄』からは、「錦鳥」が和歌や連歌の秘伝の類であるらしいとうかがうことができ、「錦鳥」の用例の少なさはそれが原因のように考えられる。

「都鳥」から連想した「錦鳥」を載せる『宗印談』と、『我身にたどる姫君』・『とりかへばや』とは、後者の方が成立年代が先行する。しかし、「錦鳥」は秘伝の類であるらしいから、それゆえに『我身にたどる姫君』と『とりかへばや』以前に用例が確認できないだけで、両作品の成立以前から「錦鳥」が内密に伝えられてきた可能性はある。

『伊勢物語宗印談』が第九段の注釈において、「都鳥」から連想した恋の仲介役「錦鳥」が、『我身にたどる姫君』と『とりかへばや』における、恋の仲立ちををする「都鳥」と関係がありそうである。

〈卒業論執筆体験記及び在学生へのメッセージ〉

「卒業論文のテーマをどのように決めましたか」と聞かれたら、「全くの偶然です」と答えざるを得ません。私には、それ以外に答えようがないのです。けれども、その偶然が起きた経緯とそれからの奮闘を聞かれたら、次のように答えることができましたよ

う。

三回生の中古ゼミでは、『浅茅が露』という中世王朝物語を全員で読むことをしました。そのときに、これまた偶然自分に割り振られた担当箇所には、本文が壊れている所があったのです。一年間検討しても解明することは叶わず、私はこれを卒業テーマにしようと思いました。しかし、坂本先生にそう伝えると、「それは難しいのではないか。他のテーマも考えてみた方がいい」と仰るのです。それもそうか、と思う反面、少々頑固なところがある私は、他の中世王朝物語を読んだら、あの壊れた本文と似た文章が出てきて解明に繋がるかもしれない、そうでなくとも、その物語から新たに卒業テーマが見つければ御の字だ、と考えました。四回生の四月、京女図書館の三階で中世王朝物語全集を眺め、「作品名がかっこいいから」というだけの理由で『我身にたどる姫君』（以下、『我身』と略す）を手に取りました。すると、そこにはいたのです、異質な「都鳥」が。私と、この異質な「都鳥」との格闘の日々が幕を開けました。

卒論に取り組むにあたって心掛けたのは、「よく動きまわる羊になる」ことです。「放牧」と呼ばれるゼミに属していたので、自由である代わりに、個羊の裁量に委ねられました。報告や質問、相談をすれば先生は丁寧に対応してくださいますが、それら

をするには、先行研究を知り、資料を集めるという前提がなければできません。せつせと草を食べ、飼い主の元へ戻り、「こんな草を食べました」と言えば、「それなら、次はあっちへ行つてみたらどうだろう」と示してくださいませ。ですから、卒論のために毎日何らかの作業をして、ゼミの時間に先生に報告できるように努めました。このことはおそらく、「放牧」ゼミに限ったことではありません。卒論は、学生自身がどれだけ動き、用例を集めるかが鍵を握ります。また、個々人でテーマを設定する卒論は、時として、ゼミの先生のご専門外のことや、先生がご存じない文献に行き当たることもあります。先生方も助けてくださいませが、自らが積極的に動いて調べていくことが必要です。

卒論に加えて、実習や就活、院試等も降りかかってきます。私は教育実習があり、卒論提出時までは進学を考えていなかったのですが、就活もありました。六月の実習までに、実習準備と並行して、先行研究の整理を殆ど終えました。実習期間中は卒論を進めることができず遅れを取るので、早めに動くことが肝要です。七月から十月は、用例を集めつつ、「卒論の合間に就活」をしました。内定を得ても卒論が出せなければ、就活の労力も水の泡だと考えていたからです。進路課からの就活状況確認の電話でそれを伝えたらかなり叱られたのですが、しかし人間、自分が納得でき

ないことは行えないものです。それに、卒論と進路に頭を悩ます卒業回生の心は繊細ですから、意に反することを無理矢理行えば、簡単に傷ついてしまうでしょう。「自分は何を優先するか」を考え、自らの意思を貫けばいいと思います。十月下旬からは、卒論を書き始めました。文章にするうちに、論を述べるために足りない資料が見えてくることもあるので、卒論の構成がある程度見えてきたら書き始めることをお勧めします。文章化が進んだら、友人たちと卒論の回し読みをし、矛盾点、分かりづらい点、表現や文法等を互いに指摘し、文章を推敲しました。テーマ決定から卒論完成まで、先生方と友人たちには、沢山の助けと支えをもらいました。

話を、卒論テーマ設定のことに戻しましょう。私は冒頭で、卒論テーマが偶然決まったと述べました。しかし、私が『我身』の都鳥が異様だと気づいたのは、それまでに読んできた作品の蓄積があったからです。『伊勢物語』の都鳥を知っていたから、『我身』の都鳥が『伊勢物語』第九段に発する本来的な用いられ方とは異なることに疑問を抱きました。知識の積み重ねが「気づき」を作ったのだと思います。また、卒論テーマがどこに転がっているかは分からないという、私のような例もあります。ですから、一つの作品・テーマに向き合うときが来るまでは、視野を狭め

ず、様々な作品に触れてほしいと思います。

そして、卒論を書くときが来たら、自分が決めたテーマにじっくりと向き合ってほしいのです。卒論を書くのは大変ですが、研究の面白さを味わうことができます。泣きみ笑ひみして一つのことに取り組んだ経験は、大学生活の大きな思い出に、そして、今後の人生の糧になるでしょう。

後輩の皆さまが、ご自身の納得のいく卒業論文を書きあげることができまますよう、応援しております。

萬葉集二八九六番歌の研究

—「不落」の訓み方を中心に—

久保千宙

〈論文要旨〉

卒業論文では、以下の歌の訓読と解釈を検討した。

歌方毛 うたがたも 曰管有鹿 いひつあるか 吾有者 われならば 地庭不落 つちには・ 空消生 そらに・

(巻十二・二八九六)

諸注釈書の指摘をふまえ、当該歌の問題点をまとめると、次の四点が挙げられる。

① 「不落」の訓み方

② 「うたがたも」の意味

③ 誰が誰に何を「言った」のか

④ 結句「生」の誤字説

これらの問題点のうち、卒業論文では①「不落」の訓み方を中心に検討した。

まず、第一章では、②から④の問題点に対する各注釈書の記述を確認し、本稿のとする立場を提示した。③「うたがたも」の意味については、『時代別国語大辞典上代編』から「一途に」の意味でとり、論を進める。

次に④誰が誰に何を「言った」のか、という点について注釈書を確認する。当該歌は作者未詳のため、男女どちらが詠んだものか正確には分からない。また、当該歌が問答歌の一部であることも、「いひつつもあるか」の内容も根拠を出して決めることは難しい。そのため、本稿では賛同している注釈書が多い説にない、当該歌を「問答歌の答えであり、男が詠んだ歌」と仮定し、相手が言ってきた内容を「地に落つ」ようなこと、と理解した。

また、④の結句「生」の誤字説についてもまとめた。ほとんど注釈書は本文を「消生」として「けなまし」と訓む説をとっている。それに対して鴻巣盛廣氏が『全釋』において、「考には生を共の誤として、ソラニケヌトモと訓んでいる。新考には乍の誤りとしてソラニキエツツとある。今、とらない。」と述べている

点にも注意する。先に、「消生」として「けなまし」と訓む場合について検討する。「けなまし」と訓む場合は、「生」を「なま」と訓み、「し」を訓み添えて、シク活用形容詞「生し」の終止形と解釈する。一方で、「けなまし」を品詞分解すると、カ行下二段活用「消」の連用形(け)＋完了の助動詞「ぬ」の未然形(な)＋推量の助動詞「まし」となる。すなわち、「生」という漢字に完了の助動詞と推量の助動詞の一部をあてていることになる。尾山慎氏の「万葉集における二合仮名について」によれば、訓字一字が二文節と対応する例は極めて珍しい。となると、「生」が誤字であるという説を否定することはできないが、元の字が何であるかを検討することは難しいため、本稿では「消生」として「けなまし」と訓む説をとる。

第二章では『萬葉集』における「消」の詠まれ方について調べ、当該歌における「消える」ものを雪と仮定することが妥当であるか検討する。『萬葉集』の「消」が使用された歌において消えるものが明記される場合は、「雪」と「露」が多く、当該歌では「空に消える」という表現であることを考慮すると「雪」の可能性が高い。『萬葉集索引』を用い、「消」を含む歌六十七首のうち、「空に消える」と詠んだものは、

こと降らば袖さへ濡れてとほるべく

降らむを雪の空に消えつつ(巻十・二二二七)

降る雪の空に消ぬべく恋ふれども

逢ふよしを無み月そ経にける(巻十・二二三三)

の二首のみであり、「空に消える」という表現は雪以外に見当たらなかった。先行研究では、山崎馨氏、植村文夫氏がこの二首を根拠にして、当該歌の「消える」ものは雪としている。また、第一章で述べたように、当該歌を問答歌の答えと考え、自らを何かに例えて消える表現と考えると、「消」が詠まれたものの中で、「雪」以外のものは、

朝露に咲きすさびたる鴨頭草の

日くたつなへに消ぬべく思ほゆ(巻十・二二八一)

朝咲き夕は消ぬる鴨頭草の

消ぬべき恋もわれはするかも(巻十・二二九一)

の二首のみであり、「鴨頭草」しかない。以上のことから本稿でも先行研究や注釈書と同じように、「消えるもの」は「雪」と仮定して論を進める。

第三章では『萬葉集』における「雪」の詠まれ方を確認し、瑞祥性や降り落ちた様子が詠まれている歌について検討する。

『萬葉集』において雪は、中国文学の影響を受け、瑞兆と認定される場合が多い。しかし、確実に瑞祥と判断できるのは作者や

場所、時期といった条件がそろったときのことであり、雪が必ず瑞兆として詠まれるわけではない。実際に『萬葉集』の雪が詠まれている歌を確認すると、「降る」、「降り敷く」のように、積雪の様子を表す言葉とともに詠まれることが多く、確実に落ちた様子を表す言葉としては、「降り置く」、「降り覆ふ」が用いられていた。「降り置く」、「降り覆ふ」を用いた歌では、

立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし

(卷十七・四〇〇一)

のように高い山に一年中残る雪や、

真木の上に降り置ける雪のしくしくも

思ほゆるかもさ夜訪へわが背(卷八・一六五九)

のように雪を恋の比喩として用いたものが見られた。また、

梅の花降り覆ふ雪を裏み持ち君に見せむと取れば消につつ

(卷十・一八三三)

では「裏み持ち」という言葉が用いられており、梅の花を覆っている雪を美しいものとして詠んでいる。このように、瑞兆とまでは言えないものの、降り積もった雪を美しいものとして詠んでいる傾向が見られた。

第四章では「落」の訓み方、当該歌「不落」に関する先行研究をまとめたうえで、当該歌の「不落」の訓み方を考察した。萬葉

集において「落」の訓字としては、オツのほかに花や葉に対応してチル、雨や雪などに対応してフルと訓まれる。

「落」という字に関して、山崎健司氏は「散り落ちた後の花の状況を念頭におきつつ、地面に落ちてしまったものには価値を認めない態度で詠んでいる」、植村文夫氏は「落ちることが美しい詠歌対象ではない」という特徴を指摘している。当該歌においては、「不落」の「落」をオツと訓むことで、「雪が地に落ちる」恋の失敗」ということをより明確に示すことができる。

また、山崎健司氏はフルに関して「落」は「降った状態(結果)」、「零」は「空からふってくる経過」を表すとしている。当該歌では「雪は空中にある」のだから、フルと訓むのならば、「落」より「零」を用いられているべきであると考える。

加えて、雪が確実に降り落ちた様子を表す「降り置く」、「降り覆ふ」という言葉を用いた歌を検討すると、第三章で述べたように、積雪はよいこととして詠まれている。当該歌の場合、「雪が地に落ちる」恋の失敗」であることから、フルと訓むことはこの傾向にそぐわない。

以上の点を踏まえ、「雪」は通常、フルと詠まれるものではないが、「落」という字の性質、「雪が地に落ちる」恋の失敗」という表現、確実に降り落ちた雪の詠まれ方という条件が重なった当

該歌においては、「落」をオツと訓むことが適当と考えられる。

よって、「落」の訓みをオツとしたうえで、「ズ」と「じ」及び上接する「には」との構文上の組み合わせの傾向も考慮し、本稿では当該歌第四句「不落」は「オチズ」と訓むべきと結論づけた。

〈卒論を執筆して〉

卒論を執筆した中で良かったと思うことは、必要な資料を早めに集めておけたことです。最終的には使わなかったものも多かったのですが、必要なものを全てコピーして整理しておいたことで、自宅での執筆も取り組みやすくなりました。反省点は、資料集め、情報整理に時間をかけすぎて、文章として書き始める時期が遅すぎたということです。できるだけ早く文章にしていくことをおすすめします。また、教育実習中、卒論関係は一切できなくなりました。

就活では、司書の採用試験を受けていました。筆記合格、面接不合格を繰り返し、最終的に決まったのは卒業間際の二月末でした。卒論を書きながら受験し続けることはかなりストレスが大きかったですが、卒論に取り組むときは、就活のことは考えないように努めました。受験対策としては、筆記試験は過去問約十年分と、関係する部分を暗記し、受験地のことを勉強して受験しまし

た。面接試験は苦手でしたのでアドバースにくいですが、緊張しても焦らないで話せたらいい結果が出るのかなと思います。

今年はコロナの影響もあり、不安が大きいかと思いますが、健康第一で取り組んでください。

日本の流行歌における当て字について

吉田優子

〈論文要旨〉

日本の流行歌には、様々な当て字を用いた歌詞が見られる。当て字であっても歌詞である以上、歌って伝えることが前提とされ、聴者が歌詞を文字として見ずとも、ある程度の意味が理解されるように作詞されている。

では、歌詞を文字として見なければ使われていることすらわからない当て字が、なぜこれほど盛んに用いられているのか。

歌詞の当て字の通時的な分析は未だ少なく、当て字の歌詞を実際に見ることにしても、その視覚的表現力や効果の研究も少ない。

卒業論文では、明治から現在の曲の歌詞に出現する当て字を集め、分類して各性質を明らかにし、歌詞の当て字の表現効果について調査した。調査対象は、作詞者の独創による当て字とし、熟

字訓等は対象外とした。

山田敏弘氏は、「いきものがかりの言語学6『当て字』」（『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』六七巻一号、二〇一八年）において、いきものがかりの曲を例に挙げ、歌詞の当て字には二つの用法があると述べた。一つ目は、当て字で読みとすることばの下位概念を表し、歌詞の意味を限定するものである。（以降、山田氏の用語にならない、「厳密化」とする）「宝石」「意志」「台詞」等が該当する。二つ目は、読みとすることばがもつ概念的意味に加えて、本来含まれない新たな意味を内包的に付加するものである。（以降、山田氏の用語にならない、「内包的意味の付加」とする）「人生」「愛」「傷跡」等様々である。内包的意味の付加は、例えば「音符」では「おもい」に「音符」を当てることで、おもい（思い）を音符に乗せて奏するという、本来の「おもい（思い）」には含まれていない新たな意味を付加し、歌詞のイメージを広げる用法である。

これらの山田氏の分類に加え、読みと文字の同等での言い換え表現も多くの曲で使われていることがわかった。「現在」「理由」等、聞き取りやすい簡単なことばを読みとし、当て字で表現するものや、「旋律」「憂鬱」のように外来語を漢字表記にする用法、そして「幸福」「運命」等のように和語と漢語の結合が多く見ら

れた。

『新版日本流行歌史上・中・下』を用い明治から平成にかけての流行歌を調査した。

明治時代の歌詞にも多数の当て字が見られた。『母ちゃんごらんよ』の「帰還つて」や『袖しぐれ』の「道徳」等も当て字で意味を重層的に伝え、厳密化に含まれると考えられる。

同等での言い換え表現では『ハイカラソング』『女子大学』『女学生』等多数見られた。

大正時代には、『広瀬中佐』『弾丸』や『平和節』『戦争』、『お山のお猿』『衣』等、戦争に関する当て字や当時の話し言葉や物を当て字で表す歌詞が見られ、世相が反映されていることが分かる。

昭和では、明治・大正に見られた厳密化の用法を受け継ぎ、更に詳細な厳密化をしている歌詞が多数見られた。『涯なき泥濘』『飲料水は無く』『煙草は空箱ばかり』『梅と兵隊』『戦闘帽』等は、状況が漢字でより詳細に伝えられている。より詳細な厳密化は、現代のJ-POPで特に多く見られ、歌詞の当て字の主流の用法として現代に受け継がれていると言えるだろう。

平成以降は、特徴的な当て字と、内包的意味の付加用法が多く見られた。特徴的な当て字とは、「運命」「時間」等のように、い

いわゆる歌詞の世界で慣用的な当て字ではなく、独創的な当て字のことを指す。当て字を多用している桑田佳祐の楽曲を例に見ると、一九八七・八八年の楽曲の当て字は、「瞬間」「時代」等の慣用的な当て字が多かったが、九〇年代では、「口惜んだ」「昂揚」等が見られ、二〇〇〇年代では一曲中の当て字数も増加し、「所得」「奇跡」「課税対象」等特徴的な当て字が増加していた。

また、昭和以前には殆ど見られなかった内包的意味の付加は、J-POPの特徴の一つだと考えられる。いきものがかりの歌詞を例に見ると、「呼吸を共鳴けて」「閃光を伝えて」等、内包的意味の付加だと考えられるものが多数存在する。

この用法で曲のイメージを広げ、聴者独自の解釈の余地を残す表現が、現代の歌詞において積極的に採用されていることが分かる。

『当て字・当て読み漢字表現辞典』で用例の多い「おもい」「とまき」「ひと」の項を見ると、小説や漫画等の用例数と比べ、全てにおいて歌詞の用例が過半数を占めていた。文字言語のみの小説等に対し、歌詞は文字言語と音声言語での表現が可能である。表記と耳で聴く音楽との表現世界の幅が大きく、両言語の隙間に創作の余地があり、当て字が多く生まれるのではないかと考えられる。

また、歌詞は音として伝わりやすいことばが選ばれ、拍数との調整も必要である。そのため、音数を節約しながら、意味を文字で詳しく表現できる当て字が多用される傾向にあると考えられる。

歌詞の当て字は見て享受することが前提である。歌詞を実際に見ることにへの関心をアンケートで調査した。回答者数は一五九名である。

「歌詞カードや字幕などを通して、歌詞を実際に見る機会は必要か不要か」の設問に対し、(1)「必要・文字として見ることで歌に対しより深く正しい理解を得るため」(2)「必要・その他」の選択肢を回答した人は一三八名(八六・八%)だった。このことから、多くの人が実際に歌詞を見ていると推測できる。そのうち一二一名が(1)を選んでおり、(2)の回答も「聞き間違いによる誤解を防ぐため」「歌詞を見たほうが覚えやすいから」等で、これらも歌への理解を深める一環だと考えられる。聴者にとって歌詞を見ることは、歌を深く正確に理解することと直結していると言えるだろう。

また、「歌詞における当て字についてどう思うか」の設問に対し、一二九名(八一・一%)が「歌詞を見て当て字に気付くと、こんな意図も隠してあるのだという発見や楽しみがある」の選択

肢を回答している。当て字は歌詞に込められた意図を享受するのに役立ついると考えられる。

山田敏弘氏は、歌詞の当て字は、多くの歌詞カードを読まない人には伝わらない暗号となると言う。しかし、アンケート結果から、歌詞の当て字は、多くの聴者に伝わっている可能性が非常に高く、曲や作詞者の意図を理解するのに役立ついると考えられる。

当て字とは歌の世界において、表現する側にとっては、豊かで重層的な意味の個性ある自由な表現を、享受する側にとっては、曲が伝えようとする意味の理解を、それぞれ支えるものだと言える。

〈卒論執筆体験記〉

これから卒業論文を書く皆さまが、納得のいく卒論を書けますようにとの思いを込めて、微力ながら私なりのアドバイスを三つお伝えします。

一つ目は「細かな作業を後回しにしない」ことです。書式設定、頭注や補注、参考文献の打ち込みなど卒論には本文以外にも気をつけるべき点が多数あります。特に書式設定は、なぜか行間が固定されていなかったり、一行の文字数が指定数に収められていなかったりと細かなミスが多発するところです。本文以外にも

時間を取られることを考え、早く着手し、余裕を持って行えるようにしておく方が良いです。

二つ目は「文章化する癖をつける」ことです。先行研究等を読む際に、自分の意見と似ているものや根拠になるもの、自分とは違う意見があったら、見返しやすいように印刷し、ノートにまとめてストックしておきます。その際に自分なりにわかりやすい言葉に書き換えるなど、各資料の内容がすぐわかるようにしておきます。

まずは忘れないうちに先行研究の感想や、そこから得られる自分の考察などを短い文章で書き出していきます。考えが変わっても前のものも消さずに残しておく、自分の考え方の変化が分かります。

そうして考察を繰り返し、書き出しておいた文章を繋いで推敲していくことで、自分の書きたい卒論の輪郭が見えてきます。

三つ目は「一年間向き合えるテーマを選ぶ」ことです。テーマの候補が出てきたら、このテーマならどのような資料を集めて、どういう方法でどのような研究が必要だろうと考えてみてください。そしてそれに取り組んでいる自分を想像し、これなら一年間めげずに向き合えると思えるものを選んでください。

テーマ選びは非常に重要です。テーマはどこに転がっているか

わかりません。日々の授業を真剣に受け、各方面にアンテナを張っておくことが、良いテーマ選びの助けとなります。

卒論執筆には時間も体力も気力もかかりますが、頑張ればその分実りある体験となります。皆さまのことを心より応援しています。

『女子大國文』投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたものでも可)。

- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

集事務局まで連絡すること。

六、(投稿先)

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピューターネットワーク上で公開することがある。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

大谷俊太・川島朋子・田上稔・山中延之

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会に於いて査読の結果を報告、審議の結果、論文については四点が掲載となりました。

また、二〇一九年度優秀論文に選ばれた、博士前期課程修了生・学部卒業生の方々に、論文要旨及び在学生へのメッセージ・論文執筆体験記をご寄稿いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(山中・峯村)